

苦節40年の歌手と出会い奮起

約40年間で手がけた歌手やタレントは30人余り。昭和50年代、歌手を巧みな口上で盛り上げてレコードを店頭で売る「キャンペーン屋」として名をなした福岡市の芸能事務所社長、沢柳則明さん(68)が今、苦節40年の演歌歌手を育てている。売れずにいたこの歌手との偶然の出会いが、消えかけていたキャンペーン屋魂に再び火をつけた。



「縁歌鳥」を歌う やしまひろみさん

キャンペーン屋「最後の仕事」

「花の二十歳で この道 なんだ曲だ。終了後、沢柳さんは楽屋で「やしま、今日はよかったよ。たまには褒めないとな」と声をかけた。

6月30日、福岡市の福岡国際センターであった農機具メーカーの感謝祭。特設ステージに、40年の下積みを経て昨年にメジャーデビューした、やしまひろみさん(62)が立った。1曲目は沢柳さんが作詞した「縁歌鳥」。これまでの苦労と、これから目指す道を盛り込

営業で福岡を訪れる歌手に付き添い、昼はレコード店、夜は中洲の飲食店を回る。調子のいい言葉で歌手を紹介、カセットテープの演奏を流して歌うのを盛り上げる。その場でレコードを売り、売り上げの1割が収入だった。デビュー直後の松田聖子さんや、「みちのくひとり旅」がヒットする前の山本譲二さんも担当した。「自分はもう帰りたいのに、社長は『もう一軒』と熱心だった」と山本さんは振り返る。

決めた 越えた年月 幾年を 歌が命の 人生修行

6月30日、福岡市の福岡国際センターであった農機具メーカーの感謝祭。特設ステージに、40年の下積みを経て昨年にメジャーデビューした、やしまひろみさん(62)が立った。1曲目は沢柳さんが作詞した「縁歌鳥」。これまでの苦労と、これから目指す道を盛り込

お笑い芸人で、演歌のレコードも出していったらって、ん荒川さんが評判を知り、「俺の頼むバイ」。マネシメントも担当するようになった。良き相棒だった荒川さんが2006年に亡くなってからはタレントを育てる気力を失っていた。だが、売れなくてもあきらめずに歌い続けるやしまさんに心を動かされ、「これが最後の仕事」と思い定め

演歌で一花 魂の手ほどき



やしまひろみさんにアドバイスする沢柳則明さん(右) = いずれも福岡市博多区

「頑張れば報われる」 伝えられる歌手めざす

事務所の持ち歌の中から「やる気節」を再スタートの曲に選んだ。レコード会社に持ち込むとメジャーデビューが決まり、CDが16年1月に発売された。しかし、何でも一人でやっていたマイナー時代の癖に手を焼いた。CDを手売りするため、身についた相手にこびる態度。会場入りは時間ぎりぎり。今年3月には、事務所が指示して営業で歌う曲目を決めていた。に、主催者の要望で違う曲を歌っていた。

「裸一貫で出直すつもりでやれ」。心のあかを落とすには、毎日をきちんと過ごしてこい

ひみつのHちゃん



黒木瞳の

「ここ最近、夫となかなか時間が合

て、気が散るから」と私が言う。すると夫は必ずミュートにする。テレビがついていないと落ち着かないのか、そのへんは私も謎だ。夫がシャンパングラスを持ってきてくれる。なにに乾杯というわけでもないが、一緒に飲み始めるときは私たちは必ず乾杯する。

「私もこの秋に58になるじゃない?」と話し始める。すると夫が、「え? 57になるんだよ」と言う。「え? じゃ私いま56?」 「58?」 「え? ウン、いま57だと思ってた。なんかひと若くなった気が

がして嬉しい」と私が言うと、「だいたい、歳を若く言う人はいるけれど、多く言う人はいないよ」と、夫も呆れながら笑う。「僕が56なんだからあなたも56。わかった?」と、子供を諭すように説明する。そうか、私は56歳を生きていなかったんだ、と思うと損した気にもなる。飲み始めたシャンパンを私はワインに切り替え、夫は焼酎へと切り替える。頃には話も尽きて、2人とも自然とテレビへと顔を向ける。

話について面白かったのは「20年前と比べると日本のクリエイターは質もセンスも進歩しレベルが上がっ

ているよね」という話になった時、そりやそうだ。20年前はグループもアイフォンもなかった。技術の進歩は人のセンスを向上させる。とはいえ私たちも50代半ば、まだまだいけるぜ!なんて豪語してはいけいない。謙虚に慎ましかにきちんとして目の前のことを行えばいいと思う。

「十二単衣を着た悪魔」だったか。若い者に負けぬ、とあがりたり惨めな面策をしないことが人の品性というもの。若い者には負けなければいい。というようなセリフがあった。今だからこそ、分かる。心に染みる。

年を重ねて分かること